

日本文学



太陽ときみの声

川端裕人／作
朝日学生新聞社（2017年）

高校二年生になった^{みつせいつき}光瀬一輝は、サッカー部のキャプテンに選ばれました。しかし、左目の視力が極端に落ちていることに気づき、右目も…。そんな時、音を頼りにプレイする“ブラインドサッカー”と出会います。

青空に飛ぶ

鴻上尚史／著
講談社（2017年）

クラス中による、凄絶ないじめによって人生に絶望した少年と、太平洋戦争時に9回特攻して9回生きて帰ってきた男。男と出会い、言葉をかかわすうちに少年の傷ついた心は前を向き始めますが…。



日本文学



ハーレーの背中

坂井希久子／著
双葉社（2016年）

進路や家族、友達関係の悩みに毎日が憂鬱な真理奈。そんな高3の夏直前、祖父の晴じい（はれい）い（い）がごついハーレーに乗って校庭に現れた！そのままタンデムシートにまたがり、向かった先で知った家族の真実とは？

スウィングしなけりや 意味がない

佐藤亜紀／著
KADOKAWA（2017年）

ナチス政権下のドイツ。ハンブルクの金持ち不良少年たちにとってジャズは最高にしゃれた文化だった。軍事色の強まる中、少年たちはスウィングし続けるため、あらゆる手段で権力のうらをかかく！少年たちの運命は…？



日本文学



僕は上手にしゃべれない

椎野直弥／著
ポプラ社（2017年）

僕の抱えているもの、^{きつおん}吃音。医学の発達した現代でも原因不明で、確立した治療法もない病気。しゃべることから逃げ続けている僕が、わずかな希望を見出したものとは。これは、自分と向き合うことを描いた物語。

ギケイキ 千年の流転

町田康／著
河出書房新社（2016年）

源義経のひとり語りです。しかも平成の20代くらいの青年の話し方。歴史や古典の教科書の義経とはまるで別人です。ちょっと下品で皮肉っぽくて、よくしゃべる。もしかしたら本当にこんな人だったのかも。

